

〈中学校総合的な学習の時間部会〉

研究主題

「地域・社会の教育資源の活用による、総合的な学習の時間の指導計画の充実」

研究の概要

平成15年12月の学習指導要領の一部改正を踏まえて、「総合的な学習の時間」の現状と課題について分析を行い、その上で各学校における全体計画作成、目標及び内容の設定、指導組織の在り方、地域・社会との連携の在り方を研究した。その中で、研究内容が実際の中学校の教育活動に生かせるよう、地域・社会との連携を図る指導計画の立案と検証授業を行い、実践事例としてまとめた。

I 研究の目的

職に就かず、就労に向けた具体的な行動もとらない、いわゆる「ニート（NEET）」が増加するなど、最近の若者が将来への閉塞感・不安感をもち、自分の生き方を見つけ出すための体験が不足している実態が明らかになり、社会問題化している。こうした現状に対し、体験的な学習、問題解決的な学習を重視する総合的な学習の時間が果たす役割は、ますます重要になっている。

そうした中、学習指導要領の一部が改正され、総合的な学習の時間の一層の充実が図られることとなった。今回の一部改正のポイントは以下のとおりである。

○各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。

○各学校において総合的な学習の時間の目標及び内容を定める必要があること。

○各学校において指導体制等を示す全体計画を作成する必要があること。

○生徒の学習状況に応じた適切な指導を行うこと及び、地域、社会との連携を図ること。

この改正を踏まえ、総合的な学習の時間部会では次の3点について研究することにした。

1 全体計画の作成と目標及び内容の設定について

実際の指導計画作成においては各学校の独自性が発揮されるが、学習指導要領の改正を踏まえ、全体計画作成における共通の視点や留意点を明らかにする必要がある。

2 校内の指導・協力体制の在り方について

全体計画を遂行していくには教師の指導・協力体制の整備が不可欠になる。今後授業改善に取り組もうとする各学校においても、指導体制の確立・充実が課題である。

3 地域・社会の教育力の活用について

地域の施設や人材を活用することで、体験的な学習の幅が広がり、内容の充実につながる事が期待される。各学校において、積極的に地域・社会との連携を図ることが課題である。

II 研究の方法

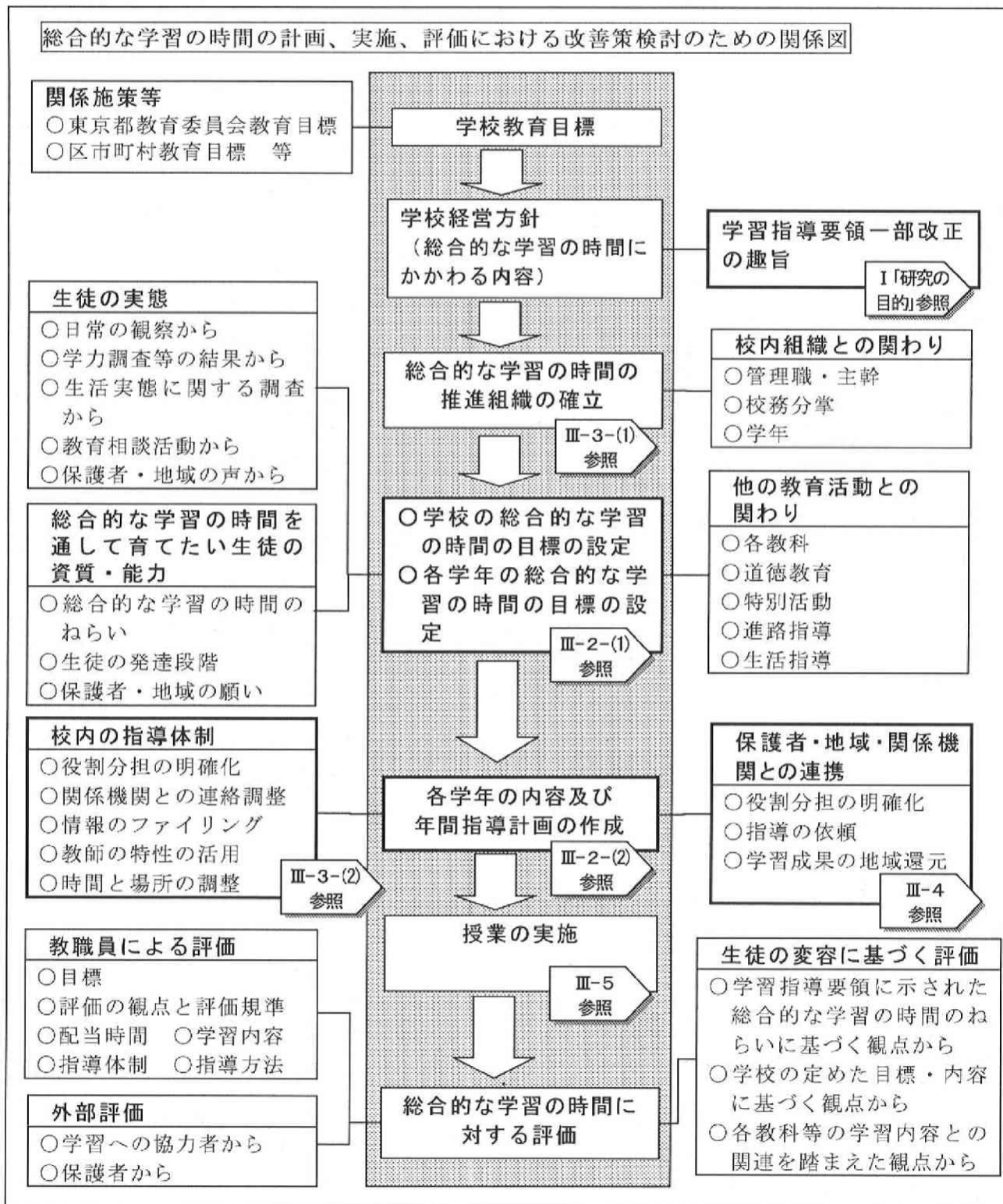
はじめに、総合的な学習の時間の全体計画を作成する上で必要とされる視点を明確にし、その上で目標及び内容の設定、指導組織の在り方、地域・社会との連携の在り方について研究を深めた。さらに、地域の教育力の活用については、指導計画の立案と検証授業を通してどのような工夫が必要であるのか追究した。

Ⅲ 研究の内容

1 総合的な学習の充実を図るための改善の在り方について

学習指導要領の一部改正を踏まえ、総合的な学習の時間の充実のための共通の視点や留意点を、学校教育目標を踏まえた計画、実施、評価の流れに沿って示した。それぞれの項目の改善のための具体的な方策は、次ページ以降に記述した。

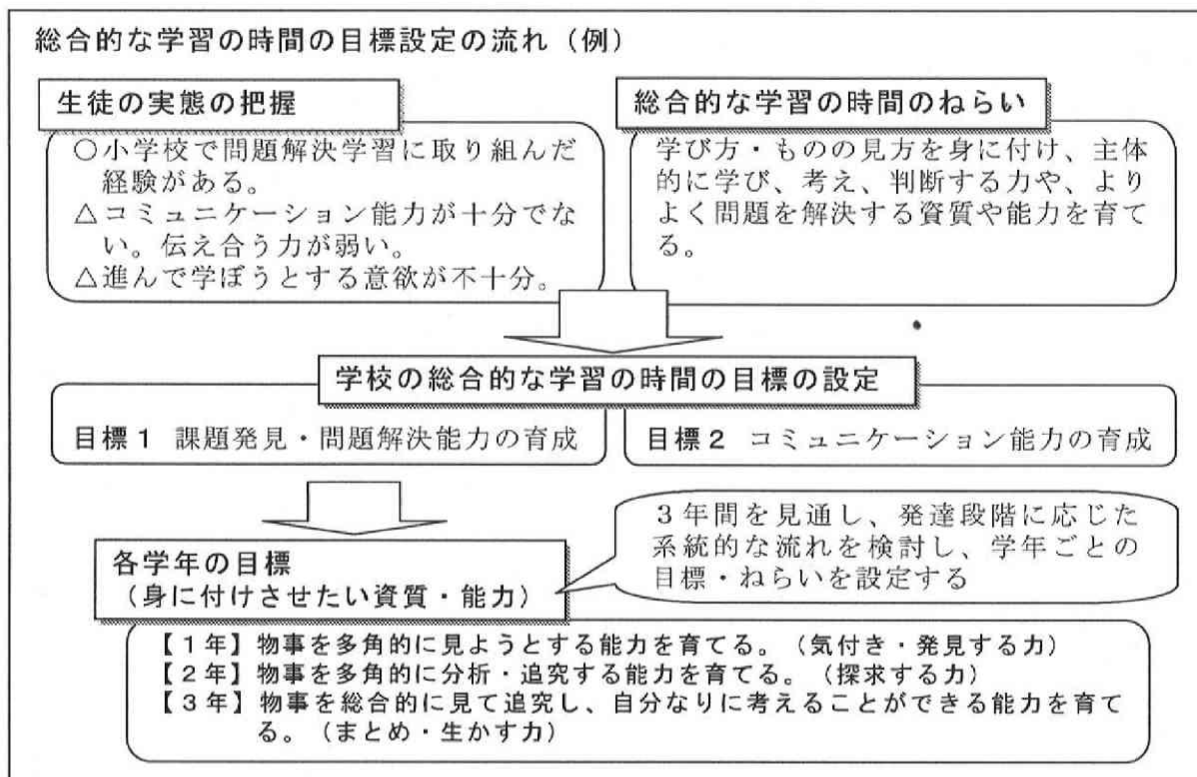
なお、太線枠は、今回の総合的な学習の時間の一部改正にかかわる点である。



2 総合的な学習の時間の目標・内容の設定について

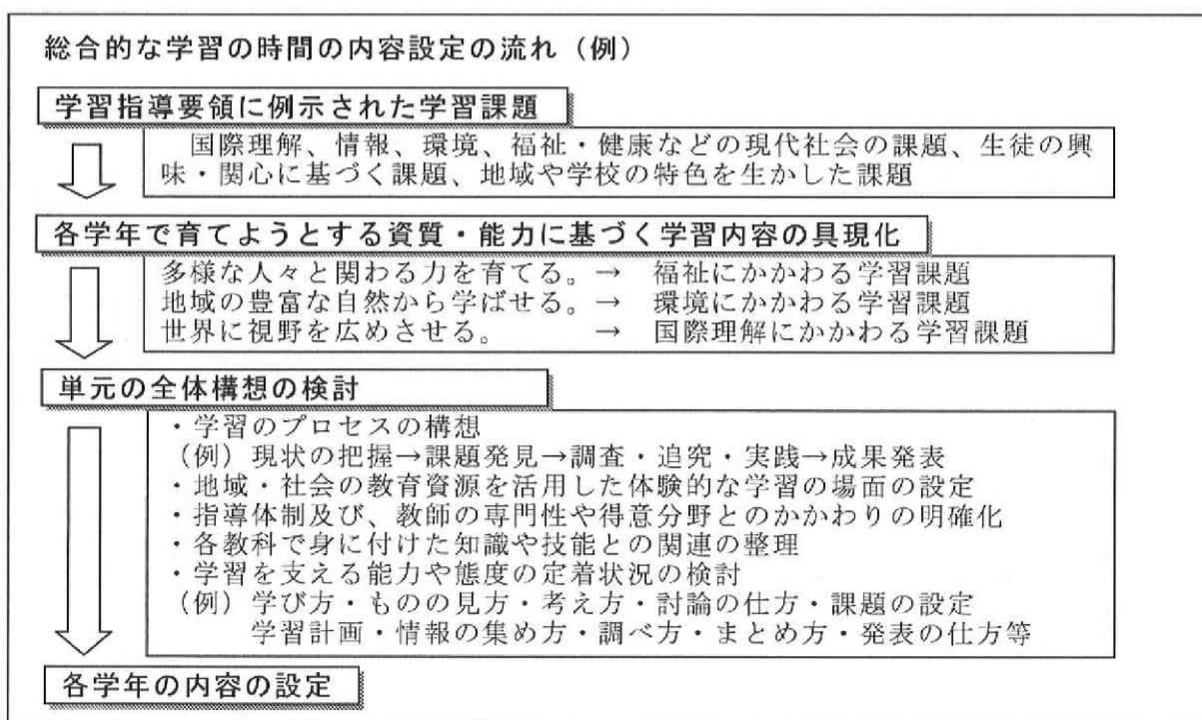
(1) 目標の設定

総合的な学習の時間の目標の設定に当たっては、生徒の実態把握に基づき、他の教育活動との関連を考慮しながら「育てたい生徒像」を明確にする必要がある。



(2) 内容の設定

設定した目標を踏まえた上で、学習課題として具体化する。次に単元の全体構想を練り、学校や地域の特色、学習教材、生徒の実態に応じて内容を決定する。

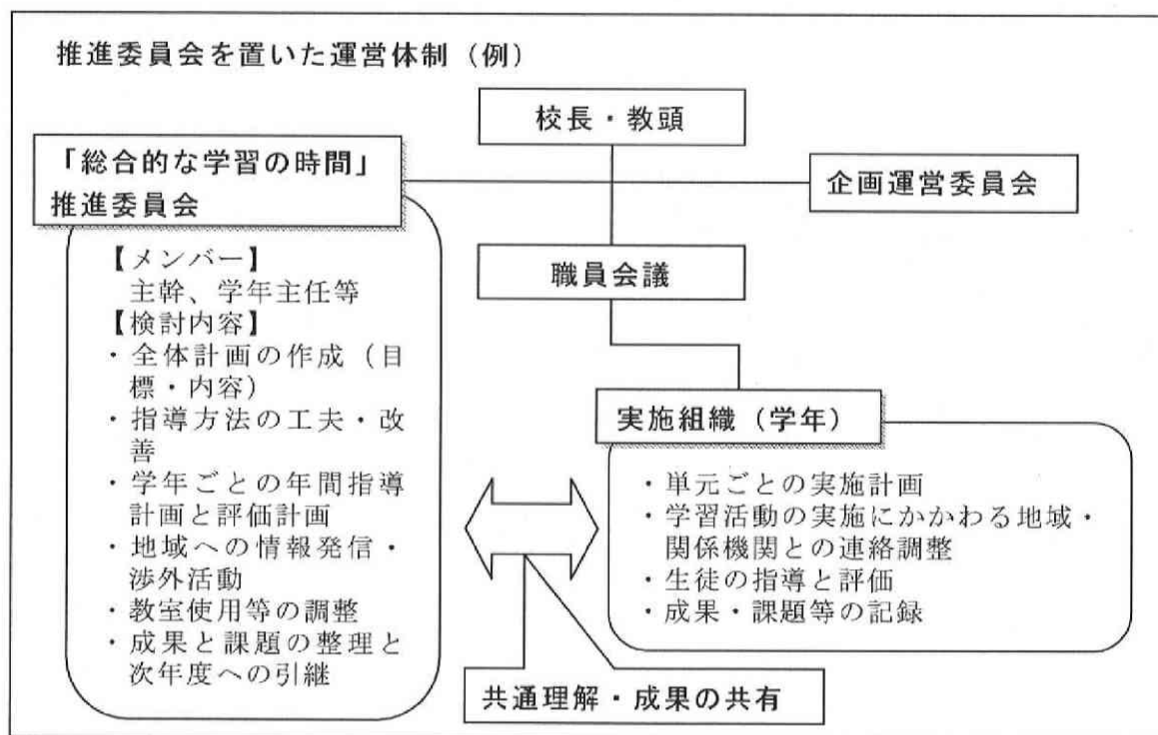


3 総合的な学習の時間の計画・指導体制と年間指導計画の工夫について

(1) 組織を生かした総合的な学習の時間の運営体制

総合的な学習の時間の充実を図るためには、全体計画の作成、指導の改善方針の策定、評価の在り方や学年間の連携の在り方などについての検討を行うなど、全校の中心的な役割を担う運営組織を確立することが効果的である。

一方、学年を中心とした実施組織は、生徒の学習状況が把握しやすく、授業交換や教室の確保などの調整もしやすいといった特長があり、全校（運営）組織と学年（実施）組織の役割を明確にすることで、総合的な学習の時間の円滑な実施ができる。



※教師の特性を生かした役割分担による指導の工夫

学年ごとの実施組織を効果的に活用するための工夫として、体験的な学習につながる「情報の収集・処理」「相手とのコミュニケーションのとり方」等のスキル学習の際に、各教師の得意分野を生かした講座をいくつか開き、生徒がローテーションで各講座を受講するワークショップ形式などが考えられる。

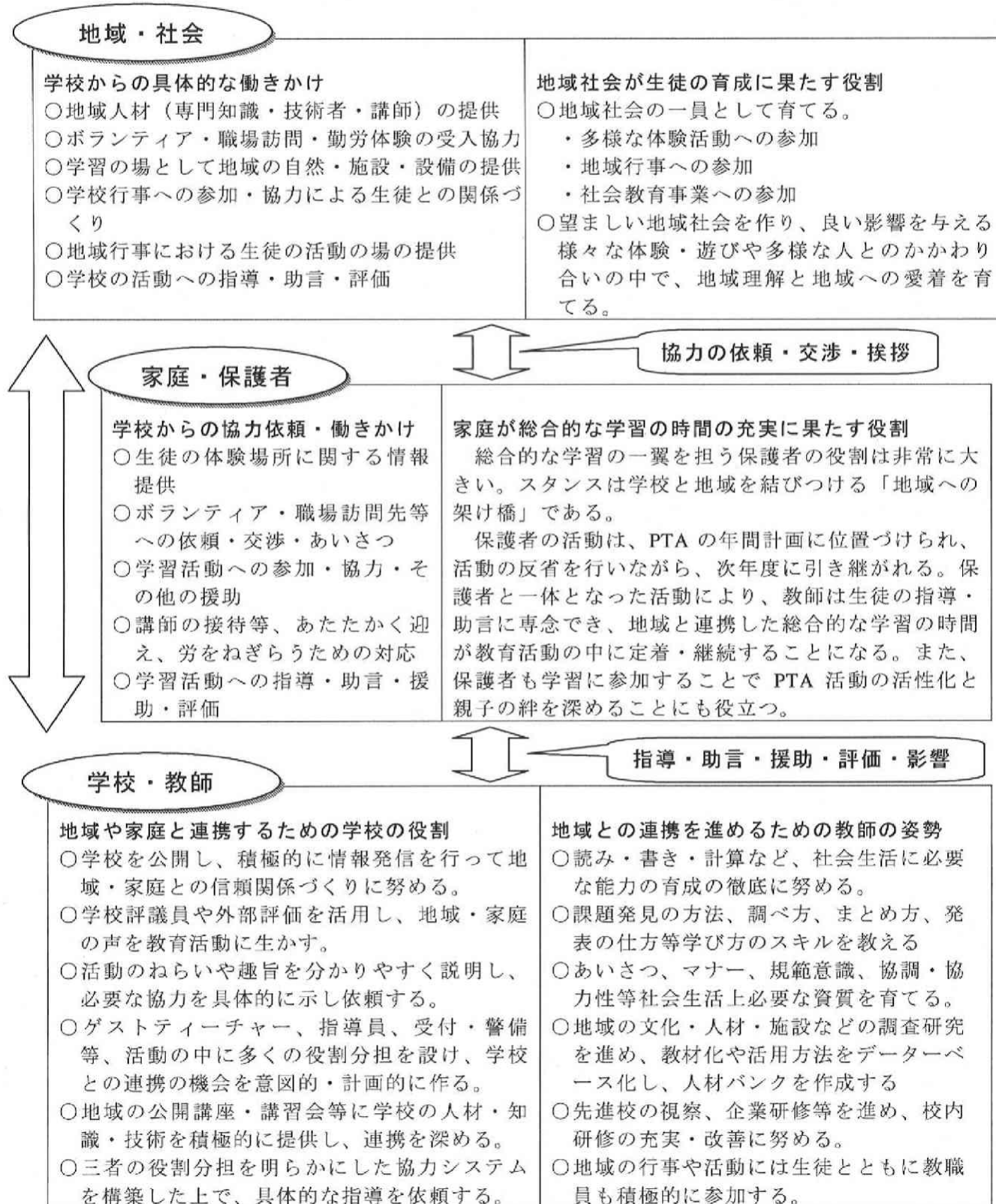
(2) 年間指導計画を円滑に実施するための時間割編成上の工夫

総合的な学習の時間の一部を年間の一定の時期に集中して実施する、いわゆる「特定の期間」での実施に当たっては、年度当初に「特定の期間」とする日程を明確にしておき、その日程に当たる各教科等の授業は、あらかじめ調整しておく必要がある。

また、学校の規模によっては、総合的な学習の時間に学年の教師が他学年の授業をもっていて、学年体制での指導が困難な場合もある。このような場合は、複数学年または全校で同じ時間に総合的な学習の時間を実施することで学年の教師が確保できるが、コンピュータ室や図書室等の特別教室の使用が重なって学習活動に支障が生じないように、各学年の指導計画を調整する必要がある。

4 総合的な学習の時間における「地域・家庭・学校」の役割分担と協力体制

総合的な学習の時間における地域の教育資源の活用のためには、地域・家庭・学校の三者の連携・協力のシステムづくりを行うことが重要であり、その際、それぞれの役割分担を明確にし、仕事を任せることがポイントである。総合的な学習の時間づくりを担い合うことで地域の関心が高まり、具体的な教育活動に参加することで協力体制が継続・定着し、成果が上がる。そのため、学校は積極的に地域・家庭に協力を依頼することが必要である。



5 指導事例

事例1 「身近な地域での職場体験」(2学年)

個人面談やアンケート調査の結果から、本校生徒の実態として、将来の自分の生き方についてあまり関心がなく、その背景に社会的な体験の不足があることが明らかになった。

そこで、2学年では職業体験を中心とした学習活動を設定し、地域で働く人たちと積極的にふれあい、その生き方を学ぶ中で、自ら課題を見つけ問題を解決する能力を身に付けさせるとともに、自己の生き方について考える姿勢を育てることとした。

(1) 単元の主題 「地域の人との共生」「自己の生き方を考える」

(2) 単元のねらい

地域のいろいろな事業所等での体験的な活動を通して、次の目標を達成する。

ア 地域で働く人たちとのふれあいの中で、コミュニケーション能力を育成する。

イ 地域で働く人たちの生き方を学ぶ中で、自己の課題を見付け、問題を解決し、よりよく生きようとする態度を育てる。

(3) 単元の指導計画(16時間配当 ○は時数) 確かな学力を育てるために、体験活動以外の各時間で重点的に育てたい力を□で示してある。☆は留意点。

	学習活動と育てる能力	指導方法、形態	指導上の留意点
第一次 動機づけ	① 総合的な学習の時間のねらいを理解し、どのように学んでいくかを考える。 □ 学び方	【学年集会】 単元の学習の目的や職業体験を中心とした学習過程を説明する。	単元の学習のねらいを明確にし、単なる体験に終わることのないように目的意識をもたせる。 ☆特別活動の進路学習とねらいが異なることを確認
	② 地域の人話を聞き、地域の特色や働く人達の様子に興味をもち、職場体験で学びたいことについて考えようとする。 □ 学ぶ意欲	【学年集会】 地域の人材を活用し、地理や歴史、特色等についての講演会を行う。	保護者や町会をはじめ、地域の各種団体、学校評議委員会等を通じて、講演を依頼できる方をあっせんしてもらう。 ☆社会科との関連 ☆保護者との連携 ☆地域の教育資源の活用
第二次 計画・準備	③ 自己を見つめ、自分の興味や関心、特性等に基づいて体験活動をする事業所の希望を考える。 □ 学ぶ意欲 □ 思考力	【各学級】 受入先の事業所の一覧を紹介、内容や条件、人数などについての説明をした上で、希望事業所のアンケートを採る。	事前準備(各事業所への打診、人数等の連絡、下打ち合わせ等)を済ませておく。 あくまでも個人の興味や意欲を基に選ぶよう指導し、班編制を行う。
	④ 職業体験を通してどんなことを知りたいのか、何を見てみたいのか、工夫してみたいところは何かを考える。 □ 課題発見能力 班内で協力して職場体験が円滑に進むように話し合う。	【各学級/班活動】 体験先の事業所、班編成を決め、各自の課題を設定させる。 交通経路の確認、役割分担やあいさつ、自己紹介などを準備に必要なことを知らせる。	☆特別活動(学級活動)との関連

	学習活動と育てる能力	指導方法、形態	指導上の留意点
第二次 計画・準備	⑤ 自分の課題を解決するための具体的な学習方法や、事業所の人たちとの良好なコミュニケーションを図るために必要なことについて考え、準備する。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 問題解決能力 知識・技能 </div>	【学年集会】 職場体験を成果のあるものとするための心構えについて指導する。 仕事をする上でのマナーや言葉遣い等、コミュニケーションの技術を学ぶ。	企業で実際に接客に関する研修を行っている担当者などを講師として招いての講習会も考えられる。 ☆地域の教育資源の活用 ☆コミュニケーション能力の育成 ☆国語との関連
第三次 体験活動	⑥～⑪ 職場体験を通して、事業所の人たちと十分コミュニケーションをとりながら、各自の課題を解決したり、新しい課題を見つけ、それを解決できるよう考えたりする。	【班単位】 教師が各事業所を見て回り、生徒の学習状況を確認する。	当日の指導は事業所の人に依頼していることを踏まえ、視点を明確にした上で活動を観察する。 (観点例) ・ねらいに沿った生徒の学習状況 ・活動の安全面の点検 ☆地域の教育資源の活用
第四次 まとめ	⑫⑬ 職場体験を通して身に付いたことや、事業所の人たちとの交流の様子について発表できるようにまとめる。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 思考力 表現力 </div>	【班単位/個人】 お礼の手紙を書く。 職業体験のまとめをする。 発表会の準備をする。	お世話になった人への感謝の気持ちを持たせる。 一連の学習を通して、考えた課題とその解決等についてまとめさせる。 ☆国語との関連
	⑭⑮ 聞く人にわかりやすい表現等を工夫し、発表する。 自分の体験や、他の班の発表から、働くことの意義や自分の生き方等についてさらに深く考える。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 思考力 表現力 </div>	【学年集会】 学年合同で、各班からの発表を、生徒による運営で行う。 受入先の事業所の方々や保護者を招待する。	生徒たちの手で、発表会が運営できるよう準備、実行させる。 ☆特別活動との関連 (リーダーの活用) ☆保護者・地域の学校参加
	⑯ 自分の学習の最後のまとめをし、今後の自分の生き方を考え、新たな課題に進んで取り組んでいく意欲をもつ。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学ぶ意欲 </div>	【個人】 学習カード、ワークシート、ポートフォリオなどを利用し、それまでの学習を振り返る。 自己評価をする。	職場体験により湧いた興味や自信が、各教科の内容をはじめとする学校でのいろいろな活動につながるよう指導していく。 活動全体を振り返り、過程を含めた個人内評価をする。

事例2 「幼稚園・保育園実習」(検証授業)

本校では、地域・社会の施設や人材を活用しながら体験活動をする中で、生徒が各教科で身に付けた能力を生かすことをねらいとして、「幼稚園・保育園実習」を実施した。指導計画の特色としては、2学年にわたる系統的な計画を立て、各教科等で身に付けた学習内容が体験的な学習で生かされ、自己の成長を実感できるようにした点である。

(1) 単元の主題 「地域との共生」「幼児・弱者との共生」

(2) 単元のねらい (1・2学年)

学年	学習のねらい	学習内容 ()内は実施時数
1 学 年	①体験を通じた学習方法を知る。 ②異年齢や異なる立場の人を理解しようとする。	(16時間) (1) 幼稚園・保育園の職員による指導「幼児への接し方」 (2) 幼稚園・保育園との事前打ち合わせを通じた学習 (12)幼稚園・保育園で実際に幼児とふれあう体験学習 (1) 礼状書きやレポート作成を通じた振り返り
2 学 年	①体験活動を通して自己の課題を発見し、解決に取り組む。 ②幼児や園の先生とのかかわりの中で、コミュニケーション能力を高める。	(26時間) (1) 学級討議による2学年の学習の振り返り(※) (1) 実習園の教頭の講演「幼児への接し方・話し方」 (1) 実習園の職員を講師として招いた、幼児に接するための実技の演習(検証授業) (1) 幼稚園・保育園実習に向けた目標と課題の設定 (6) 実習園での様々な活動に向けた練習やグループ討議 (12)幼稚園・保育園で実際に幼児とふれあう体験学習 (4) 事後学習(礼状書き・レポート・発表会)

《複数学年にわたる計画を設定したことのメリット》

1 生徒が前学年の学習を振り返りながら、より深い課題意識をもつことができる。

(2学年の単元の初めに実施した「前回の学習の振り返り」における生徒の声から)
良かったこと 「人形劇、紙芝居、踊りをやったら喜ばれた」

「一緒に物を作った」「また来てねと言われた」

反省点 「何もできなかった」「非積極的だった」「自分勝手な行動をした」

課題・目標 「恥ずかしながらやる」「もっと遊びの計画を立ててから行く」

「園児が何か新しいことをできるように教える」

2 前学年の学習の後、各教科において伸ばした力を体験活動の中で生かせる。

例 語彙も増え、書く力や、話したり聞いたりする力が伸びている。(国語)

課題発見や活動のまとめをする際の分析力が向上している。(社会・数学・理科)

演奏やものづくりの技術が向上している。(音楽・技術・美術)

思いやりの心をもつことや、礼儀・マナーへの理解が深まっている。(道徳)

(3) 体験活動に向け工夫した点

ア 実習前に生徒と訪問先のかかわりを十分に深めたこと

- ・実習前に幼稚園教諭や保育士が学校の授業に参加し、幼児と接するための諸技術を生徒に指導してもらった。
- ・実習前に、生徒が絵本や音楽の選定等について相談するため、学校を通して園を訪問し

たり連絡したりすることに対応してもらった。

イ 実習にかかわる庶務的な作業への生徒の参加

- ・生徒の実行委員会を組織し、企画・準備・実習園との連絡等にかかわらせた。

ウ 各教科における指導との関連

- ・家庭科で幼児の遊びの意義や、幼児の心身の発達の特徴について学習した。
- ・音楽でアルトリコーダーによる幼児音楽を指導し、全員で合奏を行えるようにした。

(4) 本時の指導（2学年 第3時「幼児に接するための実技の演習」）

ア 学習集団 幼児との活動内容の種別により、学年内に三つのグループを編成し、生徒は自分の目標にあわせていずれかに所属する。

イ 指導体制 各グループに実習園の教諭又は保育士が4名ずつつき、デモンストレーションを見せて実践方法を指導し、練習を行う。学年の教師は講師の補助指導や学習状況の記録に当たる。

ウ 各グループの学習内容

紙芝居・読み聞かせグループ

生徒の実行委員が園児の代わりに務め、講師が園児の集め方、座り方、視線、言葉かけ、話すテンポ、補助の仕方等を説明し、実演する。



（幼児音楽・踊りグループの実技練習）

造形（折り紙・粘土等）グループ

講師が実際の園児の作品を見せて、各年齢の園児の手・指の発達度を説明し、実演しながら教え方を示す。

生徒の実行委員は作品を見せる際の補助等を行う。

幼児音楽・踊りグループ

講師が園児の好む音楽、楽器、踊り等を説明し、実際に園児が習得している音楽や踊りを教える。生徒の練習の補助をする。

生徒の実行委員は、後日生徒だけで練習するために、講師の踊り等をビデオに撮影し、また、率先して練習をしたり声かけをしたりする。

エ 評価

- 外部講師とコミュニケーションをとりながら、積極的に活動に参加したか。
- 幼児に楽しんでもらえるように、どのような点を工夫したらよいか考えることができたか

(5) 単元の指導結果についての考察

前学年の体験活動を振り返り、実習園の教頭、教諭や保育士を外部講師として招いて指導を受け、そこで身に付けたものを実習で生かすという学習の流れと、生徒の実行委員会（プロジェクト・チーム）を活用した運営という2点から、次のような成果が見られた。

ア 生徒の学習意欲が高まり、課題意識をもって多彩なアイデアを生み出したり、集中して取り組むことで活動内容を深めたりする姿が見られた。

【参考・実習後の生徒の感想】

視線を合わせる・気持ちを察する・いっぱい会話をしながら折り紙等の作業をする等、事前に幼児との接し方について教わったことが役に立った。

イ 各教科の学習内容との関連付けを図る際、教科担任の専門性を生かすことができた。

ウ 幼稚園・保育園と中学校の教師との相互理解が図られ、指導計画の改善に生かすことができた。

【参考・実習園からの声】

・園児や生徒の交流だけでなく、教師同士の意見交換・共通理解が必要だと思う。

・体験学習が増えて、中学生への対応にも慣れてきたところだ。これからは受入側も考えなければならない。他の園と協力したプロジェクトを考えている。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 全体計画の作成と目標及び内容の設定について

各学校が「総合的な学習の時間」の全体計画を作成、又は見直す際に必要なポイントを視覚的にまとめることができた。目標及び内容の設定に関しては、生徒の実態把握から各学年の具体的な内容決定に至る手順を、ステップを追って示すことができた。

(2) 校内の指導・協力体制の在り方について

校内の指導体制として、全体の推進委員会と実施組織の二つの組織を活用する方法を提案した。また、検証授業においては生徒の学習集団作りの工夫と、教師のかかわり方を例示することができた。

(3) 地域・社会の教育力の活用について

学校・家庭・地域の連携の在り方とそれぞれの役割を構造的に示すことができた。その上で地域の人材を活用した検証授業を行い、教師と外部の指導者が年度を越えて継続的にかかわり、学習のねらいについて共通認識を持ちながら生徒を指導する事例を示すことができた。

2 今後の課題

今回は総合的な学習の時間の充実を図るための校内システムの確立という視点から、全体計画の各要素を見直していく方法で研究を進めた。しかし、総合的な学習の時間の改善には運営体制の改革だけでなく、実際の指導に当たる個々の教師の意識改革を行うことが不可欠である。総合的な学習の時間を支え、発展させるために必要な教師の資質向上を、どのように図っていくかが今後の課題である。